

感受したことをもとに協同して表現する喜びを味わう音楽科学習指導の在り方
～第4学年「日本の音楽に親しもう」における学習過程の工夫を通して～

北茨城市立中妻小学校 教諭 佐藤 礼子

1 主題設定の理由

新学習指導要領では、「我が国や郷土の伝統音楽の指導の一層の充実」が求められた。今、箸をうまく使えない、正座ができない児童が見られるなど日本の生活習慣が崩れてきていることは周知の通りである。音楽についても、子どもの遊びの中で自然発生的に歌われていた縄跳び歌やまりつき歌などの遊び歌は、現在幼稚園や保育園で教える歌となっている。身近にあるはずの日本の音楽が、特別な音楽になってしまっている。そこで、日本の音楽を児童に親しみ、もっと身近に感じてほしいという思いに至った。

日本の音楽を身近に感じるには、本来日本人としてもっている音や音楽への感性に訴え、興味・関心を高める学習を展開していくことが必要であろう。そのために、日本の音楽のよさを聴き取り感じ取る鑑賞活動と、聴き取り感じ取ったことを生かした表現活動を関連させながら学習することによって、より深く日本の音楽に親しむことができると考えた。また、児童一人一人が自分の思いを音に託し、音楽表現を考えていく過程では、音を媒介として友達と話し合い協同していくことによって自分の思いが深まり、よりよい表現へ結びつくと考えられることから、この主題を設定した。

2 研究のねらい

第4学年「日本の音楽に親しもう」における学習過程の工夫を通して、感受したことをもとに協同して表現する喜びを味わう音楽科学習指導法を追求する。

3 研究の仮説

仮説1 鑑賞場面において、音楽の諸要素を手がかりに鑑賞すれば、日本の音楽の特徴を感じ取り、表現活動に生かすことが出来るであろう。

仮説2 合奏や音楽づくりにおいて、少人数で協同する場を工夫すれば、お互いの思いを交流させ活発に音楽活動をするであろう。

4 研究の内容

(1) 基本的な考え方

ア 感受することを生かした活動

「感受する」とは、音楽を感じ取ることである。新学習指導要領では、鑑賞活動と表現活動を支えとなる指導内容を「共通事項」として示した。具体的には、音楽の諸要素や仕組みなどの構造的側面、音楽の面白さやよさ、美しさなどの感性的側面を知覚し感受することや音符や音楽にかかわる用語などを、音楽活動を通して児童に理解させていくことである。児童の感じ取った音楽の気分や雰囲気、共通事項を手がかりとして言葉で表すことによって、日本の音楽の面白さやよさを見つけていくことにつながると考える。

イ 協同して表現する活動

「協同する」とは、みんなで一つの作品を作り上げていく体験をすることである。新学習指導要領によれば高学年の「重唱や重奏などの学習において友達と思いや意図を共有しながら表現したりする体験を通して、協同する喜びを感じることが出来るような指導を重視していくこと」と示されている。この研究の対象である4年生は、集団で協力する活動を好む傾向がみられる時期である。友達の表現を互いに聴き合う場やアイデアを出し合って作品をつくり上げていく場など指導を工夫することによって、4年生でも協同して作品を作り上げる喜びを感じることができると考える。作品を作り上げる過程を通して、音楽に対する感じ方を広げたり表現に対するよさに気付いたりすることができるようにしたい。

(2) 主題に迫るために

ア 指導過程の工夫

(ア) 教材配置の工夫

題材を「つかむ」「使う」「親しむ」の3段階に分け、鑑賞を通して見つけた共通事項をもとに器楽と音楽づくり、2つの表現活動と結び付け、郷土の音楽に慣れ親しむことができるように教材を配置した。「つかむ」では、鑑賞教材を活用して、音楽の諸要素や仕組みを手がかりに民謡やおはやしの面白さやよさを見つける活動を行う。「使う」では、「つかむ」で見つけた音楽の諸要素を活用して、合奏を行う。「親しむ」では、「つかむ」で見つけた音楽の諸要素や仕組みを使って音楽づくりを行う。これらの活動を行うことによって、日本の音楽を特徴付けている要素を知覚し、音楽表現に生かせると考えた。

(イ) 音楽づくりの課題提示の工夫

ふしづくりの音やリズムを限定して提示することによって、音楽づくりへ容易に取り組めるようにする。また、児童が見つけた音楽の仕組みを活用して、音を音楽へ構成していく体験をさせたい。

イ 感じ取る活動の指導の工夫

(ア) 音直線を用いて音楽の特徴を感じ取る活動

民謡とおはやしの鑑賞をする。民謡では、「はやしことば」を、おはやしでは音色を手がかりに音直線に気付いたこと（音楽の諸要素や仕組み）と感じたこと（気分や雰囲気など）をそれぞれ記入し、郷土の音楽の特徴を見つける活動を行う。音直線とは、和歌山大学附属小学校の江田司教諭が用いた方法で、楽曲の時間的流れを中央に直線で示し、時間の流れに沿って気付いたことや感じたことを言葉や記号等で表記するものである。民謡やおはやしをそれぞれ何曲か聴き取ることによって、音直線の記入の仕方に慣れさせる。感じ取ったことをクラス全体で共有する場面をもつことによって、日本の音楽の特徴を考えさせたい。

(イ) 「音楽ポケット」の活用

学習で発見した音楽の諸要素や仕組みを示す言葉や感じ取ったことを表す言葉をいつでも使えるように音楽ポケットに掲示する。

ウ 協同して表現する場の工夫

(ア) 少人数による話し合いの場の設定

楽譜やワークシートをよりどころに、楽曲のイメージを大切にしたい話し合い活動をする。音

楽の要素を活用して合奏を行う「使う」の場面と音楽の仕組みを使って音楽づくりを行う「親しむ」の2つの場面を計画する。

「使う」の場面では、楽曲「こきりこぶし」の曲想に合う打楽器を選び、歌、リコーダーとあわせて演奏する。その時、歌詞や楽曲に合う音色という観点で話し合い、楽曲のイメージをこわさない楽器選びや楽器の奏法を考え演奏させたい。クラスを3つのグループに分け、グループごとに楽器を担当する者を決定する。同じ楽器を担当する者同士3～4名で話し合いを行う。

「親しむ」の場面では、生活班による4人で、ふしをつなぎ合わせて民謡をつくる活動をする。日本の音楽を特徴づけている5音音階の中から4音を限定し、リズムは4種類の中から1つ選んで4分の4拍子1小節のふしを作る。一人一人がつくったふしをつなぎ合わせて発表する。音楽の仕組みである「一人とみんな」(ソロで演奏したふしをみんなで繰り返すこと)を使ってふしをつなぎ、始め方と終わり方を工夫して一つの作品にまとめ楽曲を完成させる。

(i)作品発表会の設定

「親しむ」の場面で、作品発表会を行う。自分たちの民謡のどんなところに注目して聴いてほしいか、作品発表をする前に工夫したところを伝えてから発表する。演奏後、よい点を伝えあう活動を行なう相互評価を行う。

5 授業の実践

(1) 題材・目標・教材について

ア 題材 第4学年「日本の音楽に親しもう」

イ 目標 旋律の特徴や響きの違いを感じ取りながら、合奏や音楽づくりに生かし、日本の伝統音楽に親しもうとする態度を育てる。

ウ 教材 郷土の音楽（花笠音頭／ソーラン節／齊太郎節／磯節／神田ばやし／祇園ばやし）
「こきりこぶし」 富山県民謡

(2) 題材の評価規準及び学習活動における具体的評価規準

	ア 音楽への関心・意欲・態度	イ 音楽的な感受や表現の工夫	ウ 表現の技能
歌唱			○
器楽			
創作	○	○	○
鑑賞			
評価規準	郷土の音楽に関心をもって、進んで聴いたり演奏したりしようとしている。	日本の音楽の特徴を感じ取って、歌い方や打楽器の演奏の仕方を工夫している。	旋律や響きの特徴を感じ取って、のびのびとした歌で歌ったり打楽器を演奏したりすることができる。

体の学習活動における規準	① いろいろな郷土の音楽に関心をもって聴いている。	① 郷土の音楽を聴いて、それぞれの音楽の特徴や構成を感じ取っている。	① 自然で無理のない声で、曲の気分にあった歌い方をすることができる。
	② 音楽の仕組みを生かし、思いや意図をもって音楽をつくる学習に取り組もうとしている。	② 日本の音楽の旋律の特徴を聴き取り音楽の仕組みを生かし、音楽を構成するための自分の考えや意図をもっている。	② 音楽の仕組みを生かし、音を音楽に構成している。

(3) 学習及び評価の計画（8時間取扱い）

次	ねらい	主な学習活動	具体的評価規準
第1次 (2)	郷土の音楽を聴き比べ日本の伝統音楽に親しむ。	<ul style="list-style-type: none"> ・ はやしことばを手がかりにして旋律の特徴を感じ取りながら民謡を聴く。 ・ 楽器の響きの違いを感じ取りながらおはやしを聴く。 	アー① イー①
第2次 (3)	人の声や楽器の音色などの音楽の特徴をつかみ、それを生かして演奏する。	<p>「こきりこ節」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ のびのびとした声で歌う。 ・ 音色を選び、リズム伴奏の組み合わせを考え、歌に合わせて演奏する。 ・ グループで合奏する。 	ウー① イー② ウー②
第3次 (3)	ふしをつないで民謡をつくる	<ul style="list-style-type: none"> ・ 音とリズムを選んでふしをつくる。 ・ ふしをつないで民謡をつくる。 ・ 作品発表会をしよう。 	アー② ウー② イー②

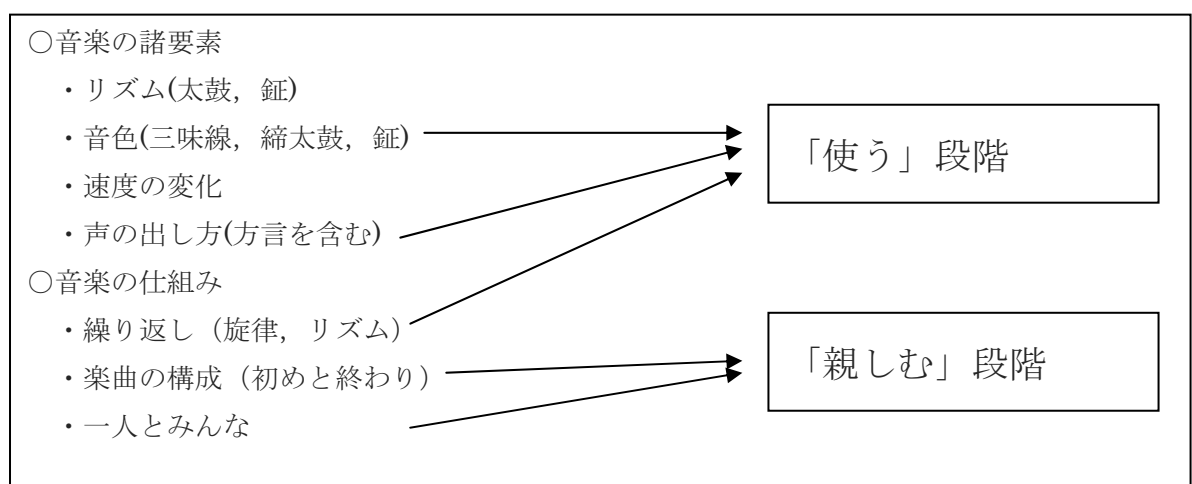
(4) 分析と考察

ア 指導過程の工夫について

(7)教材配置の工夫

題材を「つかむ」「使う」「親しむ」の3段階に分け実践したことによって、それぞれの段階で取り扱う音楽の諸要素や仕組みが明確になり、ねらいがはっきりとした。これは、「つかむ」の段階で児童が感じ取った音楽の諸要素や仕組みを把握でき、その後の指導に生かすことができた。

「つかむ」段階で児童が感じ取った音楽の諸要素や仕組みと次段階との関連



<笛と伴奏パート>

C₁: (ウッドブロックを叩きながら) 太鼓のように力強く叩くよ。

C₂: 1拍目を強く叩くといいよね。

C₃: (タンブリンを叩きながら) 鉦の音みたいに響くように指先で叩くね。

C₄: (笛を吹きながら) ずっと繰り返すだから簡単だ。

C₂: 笛も 1拍目を強く吹いてみたらどうかな。

C₄: 「ミミミレミ」(二重下線部が他の音よりも強い) こんな感じ?

C₂: うん。

音楽づくりの「曲の始めと終わりを作る」場を設定した。

どのような音やリズムを使って作品を始めたり終わりにしたりすればよいか話し合った。鑑賞で聴いたCDを参考にするグループ(右写真)は、気に入った音やリズムが出てくるとCDを止め、「今のがいいんじゃない」と児童それぞれが意見を出し合っていた。

(イ) 作品発表会の設定

作品発表をする前に、自分たちの民謡のどんなところに注目して聴いてほしい点など工夫したところを説明してから発表をさせたことにより、演奏後は工夫点をもとに、よい点を伝えあうことができた。

6 成果と課題

(1) 成果

ア 仮説1について

- ・学習過程を工夫することによって、様々な体験を通して児童が見つけた音楽の諸要素や仕組みを生かした学習を展開することができた。
- ・音楽づくりでは、課題提示の仕方を工夫したことによって、容易に音楽づくりに取り組むことができ、日本の音楽の雰囲気を感じ取ることができた。
- ・音楽の諸要素を手がかりに鑑賞することによって、楽曲の構成に気付くことができた。また、歌い方や方言による節回しなど日本の音楽のよさや面白さを感じ取ることができていた。

イ 仮説2について

- ・協同して表現する場を設定したことにより、少人数で自由に話し合い、教え合う様子がみられた。このことにより、自分の思いを歌や楽器等で表現しようとする主体的な活動ができた。
- ・音楽づくりでは、自分の作ったふしが友達のふしとつながって一つの音楽になることを楽しんでいた。はじめ方や終わり方を工夫したことによって、始めや終わりの音やリズムによって曲の雰囲気が変わることに気付くことができた。

(2)課題

- ・鑑賞において、共通事項を手がかりに気づいたこと感じ取ったことを言葉に表すことは、訓練が必要であると感じた。多様な体験学習を通して、音楽を表わす語彙を増やし自分の感じ取ったことを言葉で表す機会を増やす必要がある。
- ・グループ活動中の一人一人について、めあてが達成できているか見取るための評価の場や方法について研究する。